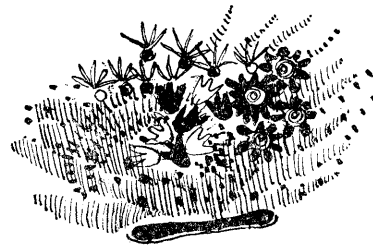


幼稚園教育課程の 変遷と幼児教育の課題

一、明治時代の保育課程

わが国における最初の幼児教育の制度的規定は、「学制」（明治五年）中の幼稚小学で「男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教フルナリ」として、小学への就学前教育を位置づけていた。

しかし、実際に幼稚園が発足したのは、明治九年十一月に東京女子師範学校に、附属幼稚園が開設されたのが最初である。



石出恵豊

当時の幼稚園での目的は、「天賦ノ知覚ヲ開達シ固有ノ心思ヲ啓発シ身体ノ健全ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ曉知シ善良ノ言行ニ慣熟セシムル」というものであった。

ちなみに同校六十年史をみると次のような保育課程となっていたようである。〈資料①参照〉

ところで、埼玉県の幼稚園は、明治十七年に埼玉県立師範学校附属小学校幼稚保育科設置から発足した。

同校の幼稚保育科規則をみると次のような保育課程となっていた。〈資料②参照〉

〈資料①〉

登園	開誘室—恩物—積木
整列	遊戲室—遊戲か体操
遊戲室—唱歌	昼食
開誘室—修身話か庶物話 (說話あるい、 は博物理解)、戸外あそび	戸外遊、開誘室—恩物
整列	帰宅

一 組 附属小学校幼稚科時間表雛形

〈資料②〉

日/時	月	火	水	木	金	土
自九時半 至十時	会集	"	"	"	"	"
自十時 至十時二十分	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話
自十時二十分 至十時五十分	讀ミ方	數ヘ方	讀ミ方	數ヘ方	讀ミ方	讀ミ方
自十時五十分 至十一時十分	唱歌	"	"	"	"	"
自十一時十分 至十一時四十分	木ノ積立	板排ヘ	木ノ積立	木ノ積立	木ノ積立	豆細工
自十一時四十分 至十二時	遊嬉	"	"	"	"	"
自十二時 至一時	画キ方	書キ方	画キ方	書キ方	画キ方	画キ方
自一時 至一時三十分	紙織リ	縫トリ	紙摺ミ	紙剪リ	縫トリ	紙摺ミ
自一時三十分 至二時	紙織リ	縫トリ	紙摺ミ	紙剪リ	縫トリ	紙摺ミ
日/時	月	火	水	木	金	土
自九時半 至十時	讀ミ方	數ヘ方	讀ミ方	數ヘ方	讀ミ方	會集
自十時 至十時二十分	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話	庶物ノ話	修身ノ話
自十時二十分 至十時五十分	會集	"	"	"	"	"
自十時五十分 至十一時十分	唱歌	"	"	"	"	"
自十一時十分 至十一時四十分	木ノ積立	板排ヘ	木ノ積立	板排ヘ	木ノ積立	豆細工
自十一時四十分 至十二時	遊嬉	"	"	"	"	"
自十二時 至一時	画キ方	書キ方	画キ方	書キ方	画キ方	画キ方
自一時 至一時三十分	紙織リ	紙摺ミ	珠繫キ	紙摺ミ	紙剪リ	紙摺ミ
自一時三十分 至二時	紙織リ	紙摺ミ	珠繫キ	紙摺ミ	紙剪リ	紙摺ミ

二 組

二、大正時代の保育課程

大正時代は期間的に短く、比較的平和な時代であったので、幼稚園教育にも自由化の傾向がみられた。

その例として、三原女子師範学校附属幼稚園の園外保育の例が典型的なものである。〈資料③参照〉

次に埼玉県内の市町村立幼稚園は、大正十四年一月に設置認可された本市の幼稚園が最初のものである。

加須幼稚園の保育課程は次のようなものであった。

〈資料④参照〉

〈資料③〉

四月	摘草（本校の山、滝の宮方面、れんげ、すみれ、はこべなどの採集、行程約五、六町）
五月	摘草、川遊び、潮干狩
六月	田植、螢狩
九月	秋の虫、山中方面への虫の採集
十月	摘草、遠足、秋の山
十一月	秋の山、どんぐり拾い、きのこ狩
三月	梅見

保育課程及時数左ノ如シ

〈資料④〉

項目	学年	
	第一学年	第二学年
遊戯	六 競争遊戯、表情遊戯、律動遊戯	六 同上
唱歌	三 平易ナル歌曲ノ唱	三 同上
談話	三 簡易ナル童話、作話、史談、事實談話	三 同上
手技	九 簡易ナル積方、排方、鑿方、摺方、豆細工	九 剪方、同、折方、掛上、粘土細工
計	二二	二二
	毎週保 育時数	毎週保 育時数
	課程	課程

三、現行の教育課程

現行の幼稚園教育課程は、昭和三十九年三月二三日付告示の文部省「幼稚園教育要領」の規定に基づくものである。内容の概要は次の通りである。

1、健康

(1) 健康な生活に必要な習慣や態度を身につける。

(2) いろいろな運動に興味をもち、進んで行なうようにする。

(3) 安全な生活に必要な習慣や態度を身につける。

2、社会（省略）

3、自然（省略）

4、言語（省略）

5、音楽リズム（省略）

6、絵画製作（省略）

以上、幼稚園の教育課程の変遷について考察を加えずダイジェスト的に、しかも資料提示の形で述べてみた。

このような教育課程の変遷を経てきている今日の幼稚園教育は、多くの課題をかかえている。

たとえば、施設の整備、父母負担の軽減、教員の待遇、教員養成、幼稚園と保育所との関係、幼稚園教育と家庭教育との関連など解決すべき課題は極めて多い。

どの問題も重要であるが、本稿では教育課程との関連を考え幼児教育のあり方をめぐる課題について次の項で述べてみたい。

四、幼児教育のあり方をめぐる課題

1、幼児にとって幼稚園はどういうところなのか

幼稚園の教育内容・方法について、知育中心か、遊び主体かの論議がある。

つまり、小学校教育への準備段階として知識やしつけを重視する「教え派」と心や体の自由な発達と社会生活への順応を目指す「遊び派」の二つの流れがあり、幼稚園側だけでなく、親たちの間でも意見が対立しているのが実情のようである。

すなわち、ある幼稚園長の「テレビを中心とする情報社会にあって、現代の幼児は自然に教やことばなどへの関心を高めている。それを放置するより、系統的に伸ばしてやった方がよいのではないか。読める書けるといった評価でなく、身につけた社会的機能としてというような意見に代表される「教え派」の意見がある。

一方、幼稚園教育と小学校教育との関連を追跡調査しているある小学校の教師の「小学校低学年では、知育型

幼稚園の出身児は、学力に優り、遊び型幼稚園の出身児は、自主性に優るという特徴がみられるが、四年生以上となると学習面でも行動面でもほとんど差がなくなってしまう。」というような意見もある。

しかし、大事なことは、人間形成に不可欠の幼児教育のあり方を考える場合、「知育中心」か「遊び主体」かの二者択一論ではなく、それを弁証する意味において「幼児にとって幼稚園とは、どういうところなのか」という原点を問い直してみる必要があるのではないだろうか。

広島大学名誉教授荏司雅子氏が「世界の幼児教育」という論文で「……日本のように幼児の早期教育とか能力開発とかいったおとなの考えで幼児を教育するのではなく、幼児期の発達課題を幼児が自ら解決するように導くことが、幼児教育であると考えている。そして保育所や幼稚園は、あくまでも幼児のための生活の場であり、生活や体験による学習の場であって、たんに知識を習得するための勉強部屋ではない。」と述べている。

欧米の幼児教育はそのような教育理念で実践されてい

るようである。このことはわが国の幼児教育の現状を反省する上で極めて重要な考え方である。

2、幼児の生育と親の養育はどのように変化しているか

幼児教育のあり方を考える場合、まず、幼児の生育と親の養育の変化の実態を認識することが問題ではないだろうか。

たとえば、私どもが子どもの頃は、生まれてすぐに出会ったのは母親の乳房であった。その乳房から自らの口で力いっぱい吸い取らねばならなかった。母親の乳房にしがみついて自らの糧を必死になって獲得したものであった。ところが、今は産院で看護婦の手から消毒された哺乳びんで乳があてがわれる。自ら求めなくても時間がくれば栄養たっぷりの乳が補給される。しかも何となく口を開けばよい。つまり、生きることの基本が大きく変化しているのが実態である。

現在ではわが国の五歳児の約九〇％が集団施設での教

育（保育）を受けている。このことは本来家庭で行われなければならない教育を幼稚園や保育所にゆだねてしまっている。いわゆる「家庭教育の外在化」の傾向をもたらせている。それは一つには、婦人の職業進出による労働条件とのかかわりもあるが、別には子どもを犠牲にしないが、自分も子どもの犠牲になりたくないというように考える傾向も著しくなっているのではないだろうか。その現象としてみられるのがベビーホテルの繁盛ではないかと思われる。

なお、幼児をもつ親の層が終戦後の教育混乱期に教育を受けてきただけに、子育てのとまどい、子どもをしつける方法もよくわからない人々が案外多いのではないだろうか。このような現実、親としての考え方の変化だけでなく子どもの育て方の変化であり、幼児の生育の変化でもある。

幼児教育に携わる者は、このような幼児の生育の変化と親の養育の変化の実態を認識して教育課程を編成し、実践することが必要であらう。

3、幼児が手を使うことは教育的にどのような意味があるのか

日本教育学会の幼児教育部門でよく論議される「最近の子どもは不器用である」ということについてであるが、このような問題を「鉛筆を削れない」から不器用であるというような現象的な問題としてではなく、人格形成の面から考えてみる必要があるのではないだろうか。

このことについては、マリア・モンテッソーリの教育理論から学ぶことができる。すなわち、「子供の知能は手を使わなくてもある水準に達する。しかし、手を使う活動によって子供の知能はさらに高められ、その性格は強められる。逆に子供が手を使える物を見いだせず、手を使って周囲にかかわる機会をもたない場合、また、手を使いながら深く集中する体験をしたことのない子供は、幼稚な段階にとどまり、人格は極めて低いものとなる。そんな子供は、素直になれなかったり、積極性を欠いたり、無精で陰気な性格になってしまうのである。と

ころが自分の手で作業できた子供は、明瞭な性格とたくましい発達を示す。」(モンテッソーリ著「吸収する精神」より)という論旨である。つまり、子どもが手を使いがらいつのまにか人格を成熟させていくという仮説(理論)を、幼児教育の実践方法として取り入れてみることも大事なことでないだろうか。

4、幼児にとって「自然」はどのような価値をもつものであるか

文部省の「幼稚園教育要領」では、幼児に対する教育目標を達成するために必要な内容として、先述のように六領域を示している。そのうち「自然」は六領域の一つとして並列的に示されている。

ところで、「自然」は幼児の人間形成にとって大きな影響力をもっていることから、教育課程の編成と教育方法のなかで重視すべきであろう。

島根大学教育学部長の近藤正樹氏が、「幼児教育の今日的課題」という論文で、「①人間への解放、②自然へ

の解放、③学校への解放、④機能集団への解放、⑤未来への解放」を提言している。

そのうち「自然への解放―原点への復帰―」という一節で次のように指摘している。

「今日の子供、とくに幼児はさまざまな仕方ですべてを喪失してしまっているといっても過言ではない。『テレビっ子』といわれ『まん画っ子』といわれ『鍵っ子』といわれ、また『塾っ子』ともいわれる今日の子供の姿は、そのまま自然喪失、人間性喪失の別名だといってもよいであろう。しかも見逃してならないことは、こうした現代っ子の気質が決して都市地域、過密地域に限らないということである。過疎なるがゆえに近隣に遊び相手をもたない。いきおい家に閉じこもってテレビやまん画に明け暮れる。恵まれた自然環境の中にありながら、自然そのものを喪失しているのである。」

このことは、自然という言葉の原意が、創造とか生産を意味すると言われることから、幼児教育のあり方のなかで反省すべき重要な課題である。

たとえば、幼稚園の教育環境づくりとして、自然園や雑草園などを造ることも一策であろうが、先述したように大正時代のものであるが、三原女子師範学校附属幼稚園の園外保育の実践も「温故知新」の教育的意義をもつものではないだろうか。

5、幼児教育は人間形成にどのような意義をもっているか

先述のモンテッソーリの手作業を通じての人格形成論にしろ、近藤正樹教授の自然への解放論にしろ、まず幼児が人間としてたくましく生きぬく力、生きることを求める能力を育てる幼児教育のあり方にもつながる重要な考え方である。

幼児の脳の重量は五歳までに、おとなのその八割までに成長するという事実、また、五歳までに、その生まれ育った文化環境のなかで生活するためのライフ・スタイルを身につけるといふ研究や調査の結果がある。

すなわち、人間らしい人間としての生き方、いわば人

間としてのライフ・スタイルを身につけることができるのは幼児期だけであるということを考えると、幼児教育は、小・中・高・大学の教育にも増して重要な位置をしめることになる。さらには、幼児教育は生涯教育の基礎として、人間形成に不可欠の教育とも言えるわけである。

そこで、先述の荘司雅子教授の「……幼稚園は、あくまでも幼児のための生活の場であり、生活や体験による学習の場であって、たんに知識を習得するための勉強部屋ではない。」という幼稚園の本質的な性格・教育機能を再検討して、幼稚園教育を充実することが今日の課題ではないだろうか。（埼玉県加須市教育委員会）

〈参考文献〉

- ① 荘司雅子著「幼児保育の原理と方法」（フレール館）
- ② 坂元彦太郎著「幼児教育概説」（同館）
- ③ K・H・リード著・宮本美沙子・落合孝子共訳「新版・幼稚園」（同館）
- ④ 大場・海・平井・本吉・森上共著「課題」とは何だろう」（同館）
- ⑤ 西村省吾他編著「教育課程と指導計画」（同館）
- ⑥ モンテッソーリ著・吉本二郎・林信二郎共訳「モンテッソーリの教育」（あすなろ書房）